

弁財天さまにあやかり、
豊かな年になりますように！



謹賀新年

2025



基本理念

病む人に寄り添い、安全かつ最適な医療を提供します



公式キャラクター
ももろう®

九州医療センターの基本理念

基本理念は2018年10月に職員全員の意見を集約して決定されました。「病む人に寄り添う」とは、常に患者さんに接して苦痛や希望を知り、患者さんの権利を第一に、ご家族や重要な関係者の思いにも耳を傾けて温かい医療を実践する姿勢を表しています。「安全」な医療とは、検査および治療成績とともに当院での成績をもとに十分な説明を行い、患者さんの理解と同意を得て、可能な限り不利益を最小限にして提供する医療です。また「最適な」医療とは、病院の総合力を生かして、いくつもの選択肢の中から患者さんの自己決定権のもとで選ばれた医療を、患者さんと医療者が協議して実践する医療です。

職員は時代の変化と患者さんのニーズに柔軟に対応できるよう日々研鑽し、医療連携を推進し、病院の健全な経営にも積極的に参画し、一丸となって基本理念および運営方針を推進します。

INDEX

- 1 年頭のご挨拶2025 岩崎、岡田、中島、甲斐、福泉
橋本、富永、西山、吉弘
- 2 さわやかナーシング 5階東病棟
- 3 医療最前線 瓜生英興
- 4 チーム医療ルネッサンス 富永圭一
- 5 ヒポクラテスのカフェ / 九州ところどころ
- 6 血管造影装置更新のご紹介 池田啓介
- 7 クリスマスツリー点灯式2024 神谷由紀子
- 8 退任の挨拶 高見、龍



新年、あけましておめでとうございます

病院長 岩崎 浩己



2025年の幕開けにあたり、“病む人に寄り添う医療”を日々実践いただいている職員の皆さまに、深く敬意と感謝を申し上げますとともに、この1年のご健勝とご多幸を心よりお祈りいたします。

ご承知のとおり、昨年末に「国立病院機構（NHO）ビジョン」が示されました。我が国の医療を取り巻く厳しい現状とNHOが直面する諸問題を踏まえつつも、NHOの強みと果たすべき役割を再確認し、未来志向の運営方針が明示されています。各病院・グループは、それぞれの地域に固有の問題を加味しつつ、自らの立ち位置と今後向かうべき方向性をNHOビジョンに照らして確認することが求められています。

昨年は、開院30周年記念事業と病院機能評価受審という大きなイベントがありましたが、皆さまのご努力によって成功裏に終えることができました。病院一丸となつての取り組みを通して、職種や立場を超えたコミュニケーションの機会が増え、信頼関係が深まったと感じています。それに合わせて、私たちの行動指針となる「KMCミッション2024」を発出したところですが、“一人ひとりがKMC”をキャッチフレーズに、職員一人ひとりの善き行いの総和が病院のブランド力になるということをお伝えしました。善き行いの第一歩は、安心して治療を受けていただくために患者さんご家族の痛みや不安にしっかりと寄り添うこと。温かみあるホスピタリティ・コミュニケーションの輪が広がる病院でありたいとの思いを込めました。さらに、九州医療センター公式キャラクター“ももろう”の誕生は、日々忙しく働く私たちの癒やしになったのではないのでしょうか。今年の“ももろう”の活躍にも乞うご期待です。

人口増加による医療需要の拡大が今後も見込まれる福岡・糸島医療圏にあつて、地域医療の中核を担う九州医療センターの果たすべき役割は益々大きくなることが必定です。築30年を超えた病院設備を時代に合ったものへ更新していく必要がありますが、健全経営の堅持なくしては叶いません。病床利用率90%の目標達成にご協力をお願いいたします。また、少子化に歯止めが掛からない現状にあつては、業務の効率化と人材の確保・育成に注力する必要があります。一人ひとりのアイデアをつなぎ合わせることで、安心して生き生きと仕事ができる環境をさらに充実させましょう。

本年もどうぞよろしく願いいたします。

国立病院機構（NHO）ビジョン 概要

NHO運営の基本的考え方

- 人口減少に伴う患者数の減少、労働力人口の減少、諸物価の高騰など、我が国の医療を取り巻く環境はさらに厳しい状況。また、NHOは、令和2年度以降、毎年度の医療収支が300億円超の赤字が継続し、**危機的な財務状況**。
- 以下の3つの観点で、今後の国全体の医療需要等の動向を踏まえたNHOが直面する課題を整理し、どのように取り組んでいくのかという改革の方向性を提示。
 - ① NHOの強みであるスケールメリットや病院の多様性を活かして、各病院の個性を發揮しつつ互いに連携しながら、**地域のニーズに応じた質の高い医療を提供**
 - ② 人材不足等が進む中で、安定して医療を提供していくため、病院・グループ・本部が一体となつて、**全職員が安心して、誇りをもって働くことができる職場づくり**
 - ③ NHOが求められる役割を果たし、法人全体として持続可能な運営を維持していくため、**着実な経営改善の推進**

質の高い医療の提供、臨床研究の推進

- **質の高い医療の提供**
 - ① **地域医療への貢献**
 - ・5 疾病 6 事業等の質の高い医療を提供し続けることは、NHO病院の重要な使命
 - ② **重症心身障害、神経・筋疾患**
 - ・療養環境の充実を図り、引き続き確実に入院医療を提供
 - ・地域移行のニーズに対応するため、オンラインの活用や在宅療養支援の取組を実施
 - ③ **結核・エイズ**
 - ・「モデル病床」の活用を含め結核病床の効率的な運用の検討、病床削減を含め結核病床のあり方を地方自治体と調整
 - ・引き続きエイズへの取組推進に向けた役割を遂行
 - ④ **精神・心神喪失者等医療観察法医療**
 - ・地域移行に向けた機能の強化、病院の規模・機能を見直し
 - ・心神喪失者等医療観察法医療について、他の公立病院等との役割分担や集約化を含めたNHOの今後の役割について検討
 - ⑤ **災害・新興感染症**
 - ・NHOのネットワークを生かしつつ、引き続き積極的な取組を実施
 - ・平時からの準備や国民への訴求力向上に向けた取組を実施
 - ・他の公的病院等と役割分担や連携を推進
- **虐待防止対策**
 - ・本部で検討体制を組み、NHO全体で組織風土の改善等を含めた虐待防止対策の取組を実施
- **医療DXの推進**
 - ・政府の医療DXを推進、政府が目指す統一的な電子カルテの導入等を検討
- **臨床研究の推進**
 - ・NHOのネットワークやスケールメリットを活用した研究の推進
 - ・国が進める高度で実践的な医療提供のための研究や疫学研究の取組を実施
 - ・NHOCRBの活用推進、一層の治験事務の合理化や透明性の向上

働きやすく働きがいのある職場づくり

- **人事制度や雇用制度の見直し**
 - ・限定した地域や病院での勤務など雇用形態の多様化や柔軟化
 - ・医師事務作業補助者の常勤雇用化
 - ・職員のモチベーションが一層高まるような給与の仕組みの検討
- **勤務環境の整備**
 - ・ハラスメントのない職場を目指した取組の実施
- **IT化等による業務効率化の推進**
 - ・全職員へのスマートフォンの配布
 - ・共通業務の集約化
- **教育研修の充実と人材確保の強化**
 - ・幅広い職種やキャリアに応じた教育・研修プログラムの充実・体系化の検討
 - ・NHOの全国ネットワークを活用した緊急医師確保支援の人材マッチングシステムの構築や医師派遣策の検討
 - ・看護師を組織的に確保していく体制や仕組みの構築
 - ・本部から附属看護師養成所へのハード面やソフト面での支援等による看護師の確保
 - ・病院運営・経営のスペシャリスト養成の仕組みづくりを目指し、「NHO事務部門人材育成ビジョン」を策定・公表

健全な経営に向けた改革等

- **更なる経営改善に向けた取組**
 - ・経営改善に関する研修の充実等による、経営改善に向けた意識・手法等の共有
 - ・各病院の自律的な経営改善推進のため、経営状況が良好な病院へのインセンティブの導入を検討
 - ・共同調達の拡大等による、スケールメリットを生かした経営改善策の実施
- **効率的・計画的な投資の推進**
 - ・建物の建替・大規模改修は、優先順位を考慮しながら順次、計画的に実施
 - ・投資手続の簡素化、本部から病院への投資判断の支援
 - ・投資効果の検証は「事前チェック」から「導入後の効果検証」に重点を移動
- **法人全体としての経営改善の実現**
 - ・ダウンサイジング、機能転換、再編・統合（廃止を含む）など、地域の状況を踏まえた幅広い選択肢について柔軟に検討
 - ・経営改善の見込みが立たず、地域に必要な医療機能を引き続き提供する必要がある場合、必要な支援を含め、自治体と協議
 - ・病院と本部・グループとの業務分担や体制のあり方を見直し
- **NHOがより安定的に経営を行うための対応**
 - ・資金の安定的な確保や新たな事業の実施に向けた制度の見直しの検討
 - ・地方自治体等から、必要な財政支援や人材確保支援等が受けられるよう取組を推進

◆ ◆ ◆ 温かみあるホスピタリティで国民の医療、医療制度を一步先へ牽引

副院長 岡田 靖



九州医療センターのミッションと

国立病院機構のビジョンに想う

昨年、岩崎病院長から九州医療センターの7つのミッションが発表されました。その中で私がとくに大切に感じているのは「02基本理念を大切にしたい温かみあるホスピタリティ・コミュニケーション」です。最近、電子カルテ冒頭の重要事項に、何の説明もなく赤色の大きな文字で「DNAR ; Do Not Attempt Resuscitation =心肺蘇生を実施しない指示」と無造作に書かれた診療記録をみかけました。その患者さんは表情豊かで十分な認識力があり、自分の希望を述べることができ、さまざまなケアや治療が必要な方でした。この「DNAR」は、心肺停止時に無効な蘇生を試みないというだけの意味で、点滴や栄養、リハビリテーションなど他の生命維持や日常生活動作を改善するために必要なケアや治療を差し控える指示ではありません。DNAR方針、延命治療の差し控えについての説明は医師一人では行わず、看護師を含む医療・ケアチームでそれぞれ検討し、合意形成を得る必要があります。医療チームはコミュニケーションを大切に、患者中心の医療を念頭に、温かみのある

ホスピタリティで患者家族に寄り添い、ケアと診療に対応していただきたいと思います。

昨年末、国立病院機構（NHO）本部からNHOビジョンが発出されました。私はビジョンの核心は④国の医療政策への積極的貢献の部分だと思います。ただし、この「貢献」という言葉は主体性が乏しいと感じました。厚生労働省の関連組織として命じられた任務に「承知しました！SURE、SURE！」と応じるだけでなく、時には一施設の新しいアイデアで新たな挑戦を全体で行うことができればと思います。日本赤十字社の「人間を救うのは人間だ！」のようなスローガンが必要です。自分なりにNHOビジョンを考えた時、「国民の医療と医療制度を一步先へ牽引する」が思い浮かびました。NHO職員には高い志と情熱ある医療者が多く、結集すれば大きな力を発揮できると思います。大学病院や国立高度医療センターは「最先端をめざす」、NHOは身の丈に合わせて「国民の医療、医療制度、臨床研究を一步先へ」牽引する。これで職員のモチベーションやプライドもさらに高まるのではないかと思います。今年は巳年、これまでの古い慣習を破り、脱皮して大きく成長したいものです。

◆ ◆ ◆ 新年あけましておめでとうございます

副院長 中島 寅彦



昨年はコロナパンデミック緊急事態宣言の収束後1年を経て、世の中の活気がもどり経済活動も回復した年となりました。当院では7月に開院30周年記念祝賀会を催し、たくさんの関係者の皆様にご出席をいただきました。また、同月の病院機能評価の受審を通して、組織横断的に当院の医療の現状を見直すとても良い機会となりました。

今年は病院敷地内北側に放射線治療センター棟が完成し、放射線治療装置が追加導入されます。私自身、がん（頭頸部領域）の診療を専門としており、すでに2台体制となっている手術支援ロボット（da Vinci）の運用の充実を含め、がん診療の拡充に大きな期待を持っております。我が国では生涯で2人に1人が何らかの「がん」に罹患し、すべての国民にとって身近な病気となっていますが、一方で診療機器の進歩、薬物療法の進歩によりがん死亡率（人口の高齢の影響を除いた年齢調整死

亡率）は減少しています。当院の強みは全診療科が高度な医療を提供できる「総合力」であり、ほとんどすべての領域でのがん診療の提供が可能です。今後も最先端の医療の発信や提供に向けた努力と進化を継続してゆく責務があると思っています。

コロナ収束後、さまざまな勉強会や情報交換を対面で行う機会が復活しました。また、昨年12月には外来の一角に「医療相談コーナー」を新たに設け、患者さんやそのご家族が気軽に各種の相談をできるようにしました。講演会の開催、広報誌やSNSを用いた広報活動もさらに充実させ、患者の皆様や地域の医療施設の皆様とのコミュニケーションをさらに活性化してゆこうと考えています。

今年の干支は「巳」です。皮を脱ぎ捨て新たな姿に生まれ変わる姿から、巳年は新しい挑戦や変化を目指す年だといわれています。現状維持に満足せず、常に向上心を持ちながら、充実した1年を目指したいと思います。

本年もどうぞよろしくお願いたします。

年頭所感

統括診療部長 甲斐 哲也



新年あけましておめでとうございます。2025年の干支は乙巳（きのと・み）だそうです。乙（きのと）は、十干の2番目で「木」のエネルギーを表し、植物が成長し広がっていくことを象徴し、巳（み・へび）は脱皮を繰り返して成長することから「再生と変化」を象徴するということから、乙巳の年は、「再生や変化を繰り返しながら柔軟に発展していく」年とされているそうです。長年、当院の肝胆膵外科を牽引し、臨床研究センター長を務めていた高見裕子先生が、お父様の介護のために2024年末をもって退職されました。常に明るく周りを和ませながら、前向きに組織を牽引する姿は頼もしく、私はいつも羨望の念を持って見守って

いましたので、退職はとても残念です。一方で高見先生の退職によって病院幹部に新風が吹き込まれます。この変化が当院の発展につながることを祈念したいと思います。当院は現在、経営的に苦しい状況にあります。人件費の高騰と設備投資の負担が大きな理由ですが、人と設備は病院の機能を支える基盤ですので、将来への大事な投資であり、今は我慢の時だと思います。私は麻酔科医ですが、病院の大きな収益源である手術が、麻酔科医不足のために十分に行えない状況があり、経営に悪影響を及ぼしているとともに、患者さんを紹介頂く連携施設の先生方には手術待ちの長さでご迷惑をお掛けしていることを申し訳なく思っております。2025年度には何とか麻酔科医を充足させ、病院の経営状態も改善し、乙巳の年の内に新病院構想が進展することを切望しています。

令和7年九州医療センターの医療DXの未来

医療管理企画運営部長/医療情報管理センター部長 兼任
地域医療研修センター長/NSTチェアマン/消化器内科（肝胆膵） 福泉 公仁隆



新年、明けましておめでとうございます。令和7年を迎えるにあたり、地域の皆さまと職員の皆さまに感謝いたします。令和6年7月に当院は開院30周年を迎え、病院機能評価3rdG_Ver.3.0を受審、当院の診療機能とケアの質は高く評価されました。さて、令和7年は、更なる飛躍の年と位置付け、医療のデジタル化（DX）推進を目指します。マイナンバーカードを利用した電子処方せんサービスや電子カルテ情報共有サービスも当院も稼働を開始します。また、近い将

来には、AI技術の発達により、電子カルテ上で、退院時要約や診療情報提供書作成業務、画像診断レポート作成業務も可能になり、医師の業務の更なるタスクシフトも可能になるでしょう。同時に、医療情報におけるネットワーク上のセキュリティ対策が必須となります。2030年頃には、すべての医療機関において標準的な電子カルテの導入により、電子カルテ情報の共有も可能になるでしょう。

今後も医療の質と患者満足度の向上を目指し、地域の皆様と医療機関の信頼を一層深めるよう尽力いたします。本年もどうぞよろしく願いいたします。

年始のご挨拶

薬剤部長 橋本 雅司



新年あけましておめでとうございます。昨年も、多くの困難と変化がございましたが、皆様の絶え間ない努力とご支援のおかげで無事に乗り越えることができました。心より感謝申し上げます。

本年も引き続き、患者様の健康と安全を最優先に考え、質の高い医療サービスの提供に努めてまいります。新しい医療技術の導入や薬剤の適正使用の推進を図りながら、地域医療への貢献を一層深めていく所存です。

薬剤部としては、今年は注射薬ピッキングシステムの導入や電子処方箋の発行に向けた体制整備を積極的に進めてまいります。

注射薬ピッキングシステムの導入により、薬剤の管理効率を大幅に向上させ、調剤業務の迅速化と正確性の向上を図ります。また、電子処方箋の発行により、患者様の情報が迅速かつ正確に共有され、医療チーム全体での連携がより一層強化されることを期待しております。

昨年の経験を踏まえ、本年はより一層の進化と成長を遂げる年としたいと思います。新たな課題に挑戦し、全力で取り組むことで、さらに高いレベルの医療サービスを提供していく所存です。職場全体の生産性と士気を高め、患者様へのサービス向上に繋げてまいります。

最後になりましたが、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。本年もどうぞよろしく願い申し上げます。

◆◆ 広域連携型プログラムについて

臨床教育研修センター長 富永 光裕 ◆◆



年頭にあたり、まずは臨床研修にご協力頂いているスタッフの方々へ感謝申し上げます。臨床研修への病院全体での取り組みが評価され、今年度も29名の募集定員（総合プログラム25名、小児科プログラム2名、産婦人科プログラム2名）に70名を超える応募がありました。指導医のみならず多職種の指導者の協力のもと、元気で研修へのモチベーションが高く、コミュニケーション能力に長けた将来性豊かなフレッシュな研修医を4月には迎えることができると期待しております。

さて、2026年度採用の研修医から、福岡県からの要請で広域連携型プログラムを開始することとなりました。地域医療を担う医師の確保を目指すものであり、医師少数県の協力型病院で、2年次に24週以上の研修を含むプログラムです。福岡県には21名以上の募集が必要とされ、当院には3名が按分されています。他のプログラム同様に興味深いものでなければ応募して頂けないと思われ、九州、山口の対象となる地域の協力型病院と連携して行うプログラムを準備しております。皆様方のご協力で、このプログラムが、当院臨床研修の魅力の一つとなることを願っております。

◆◆ 新年のご挨拶

看護部長 西山 ゆかり ◆◆



あけましておめでとうございます。皆様におかれましては健やかに新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。今年乙巳の年です。乙は草木がしなやかに伸びて広がっていく意味があり、巳は草木の成長が極限に達して、次の生命が宿され始める時期とされています。これまでの努力や準備が実を結び始める時期と言えます。昨年は、祝30周年「一人ひとりがKMC」のスローガンのもと、病む人に寄り添う医療、看護の実践を職員一丸となって取り組んできました。お互いをリスペクトし、患者さんも職員も

満足できる環境作りにつとめてきました。病院機能評価では高評価をいただき、看護職員の離職率も大幅に減少しました。病院公認キャラクターの「ももろう」が誕生し、看護部インスタグラムも始めました。看護部の活動や教育研修の実際を紹介しています。皆様にも是非ご覧いただければと思います。

今年も一人ひとりの善き行いの総和が組織の力となり、地域の皆様に益々必要とされる九州医療センターであり続けることができるよう、前に進んでいきたいと思っています。笑顔の多い、明るい一年となりますよう、ご支援の程よろしく願いいたします。

◆◆ 新年のご挨拶

事務部長 吉弘 和明 ◆◆



新年あけましておめでとうございます。旧年中は職員の皆さん方をはじめ、関係者の皆さん方には、事務部の業務にご理解、ご協力をいただき改めて感謝申し上げます。また、地域の医療機関の先生方には、平素より当院の運営に格別なご理解、ご支援を賜り、厚く御礼申し上げます。

当院の令和6年度の経営状況は、給与費、材料費、設備関係費（減価償却費）の大幅な増加により、収支の悪化は避けられず、残念ながら医業収支は赤字という状況ですが、本年においても、健全経営の堅持に向けて事務部職員一丸となって経営改善・業務の効率化等に取り組むとともに、頼られる事務部門を目指して、更なる躍進を図っていきたいと考えております。

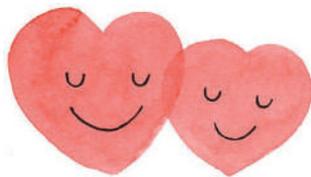
また、地域医療構想に沿った病床の機能分化・連携が求められる中、従来にも増して地域の医療機関の皆様方との連携強化を図っていく必要があると考えておりますので、本年においても、変わらぬご支援、ご協力を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

話は変わりますが、2025年の干支は「乙（きのと）巳（み）」であり、乙巳の年は、「努力を重ね、物事を安定させていく年」といわれております。当院におきましても、従来にも増して患者さんに寄り添う医療が提供できるよう、これまで以上に努力を重ねていきたいと考えておりますので、本年もよろしくお願いいたします。

心不全患者を地域で支える～福岡県地域包括ケアシステムとの協働を目指して～

5階東病棟

心不全とは、あらゆる循環器疾患の終末像であり、増悪と寛解を繰り返しながら、運動耐用量の低下をきたし、生命予後が悪化する症候群です。心疾患は日本における死亡原因の2位であり、高齢者の増加に伴い、高齢の心不全患者が大幅に増加する「心不全パンデミック」が予想されています。心不全の再入院は繰り返すと心臓のポンプ機能や下肢筋力低下などの身体機能を徐々に低下させ、健康寿命を縮めることから、再入院を防ぐことが重要です。また、心不全患者が自宅に帰ってからも安心して、心不全の増悪なく過ごせるよう、地域全体で診ることが重要です。5階東病棟では、心不全患者が心不全を増悪することなく安心して過ごせるために、多職種で様々な介入を行っています。



2020年から心不全療養指導士の資格が創設され、当院の循環器チームスタッフもこれまで述べ14名が資格を取得しました。心不全療養指導士が中心となって、月に2回心不全カンファレンスを開催しており、医師・病棟看護師・外来看護師・理学療養士・MSW・栄養士・薬剤師・緩和認定看護師が参加して、患者の問題点や退院に向けて必要な介入などについて話し合っています。多職種でカンファレンスを行うことで、それぞれの視点で意見を出し合い、様々な工夫を行いながら心不全患者の支援を行っています。

2023年から県全体の循環器患者に対する包括的な支援体制を構築することを目的に、福岡県内で唯一、当院に「福岡県循環器病総合支援センター」が設置されました。当院での治療歴の有無に関わらず、循環器疾患に関する相談を受け付けており、様々な疑問や不安に対して心不全療養指導士が悩みに応じた解決策と一緒に考え、心不全予防に向けた支援を行っています。11月1日には、福岡県と連携して『福岡県地域包括ケ

アシテムとの協働のための研修会』をハイブリッド形式で開催しました。多数の施設から参加があり、当院での取り組みやハートノートの活用について意見交換や周知を行うことが出来ました。ハートノートとは、大阪心不全地域医療連携の会が始めた自己管理ノートで、当院では2023年6月に導入しました。血圧や体重、自覚症状などを毎日記載し受診行動に繋げるとともに、医療機関同士が連携するためのツールとしても活用できます。ハートノートは、症状を点数化することで、点数に合わせてどのように行動すればよいか明記されており、心不全の増悪に自分自身で気づき、どのタイミングで受診すればいいのかが分かりやすく、早期受診につなげやすいという利点があります。ハートノートを導入して約1年半で導入件数は70件となり、その間心不全増悪で再入院となったケースが7件ありましたが、うち5件はハートノートで心不全増悪に気づき、早期受診することができていました。また、退院後も継続して患者を支援できるよう、ハートノートを活用して外来看護師と患者情報を共有しながら、外来受診時にハートノートの記載状況や体調の変化、質問などに対応しています。退院後に訪問看護などの介護福祉サービスを利用する患者については、退院前カンファレンスで在宅医療従事者との情報共有を行っています。今後は地域で心不全患者を診ていく共通のツールとしてハートノートを普及させる必要性を感じています。当院から地域の急性期病院、回復期・リハビリ病院、そしてかかりつけ病院にハートノートを発信していくことで、心不全患者の自己管理と早期受診に繋がることを期待しています。

今後さらに増加が見込まれる心不全患者が、退院後も疾患とうまく付き合いながら自分らしく生活できるように、「福岡県循環器病総合支援センター」として地域の医療機関と協働していきたいと思います。



九州医療センター 心不全チーム

ロボット支援手術 da Vinci Xi 2台体制

九州医療センターでは、2013年よりロボット支援手術を導入し、これまでに約2,000件の手術が行われています。当院では、米国のIntuitive Surgical社製「da Vinci Xi」システムを2台体制で運用し、6つの診療科がこの技術を活用しています。泌尿器科、消化器外科、呼吸器外科、婦人科、肝胆膵外科、そして耳鼻咽喉科・頭頸部外科と、幅広い領域で利用されています。

ロボット手術の導入当初は先進的で特別な治療とされていましたが、現在では多くの症例において日常診療の一部となっています。これは、医師やスタッフがその利便性と安全性を認識し、技術的な習熟が進んできたからにほかなりません。医師は、ロボット手術の導入により「手術の精度が格段に上がり、手術中のトラブルも減少した」と実感しています。「大事な神経や血管の温存がしやすく」、「開腹手術と腹腔鏡手術の良いところを併せ持つ」ロボット手術は、患者さんの負担を軽減し、より良い治療成績をもたらしています。

「ロボットが自動で手術を行う」という誤解がありますが、実際にはそうではありません。ロボット手術は、あくまで外科医の操作によって行われるものであり、その精度と結果は外科医自身の知識と技術に依存しています。ロボットは医師の手を補助するツールであり、細かな操作を可能にすることで治療の質を向上させる役割を果たしています。

耳鼻咽喉科・頭頸部外科におけるロボット支援手術

耳鼻咽喉科・頭頸部外科においても、ロボット手術は重要な役割を担っています。咽頭癌や喉頭癌に対して2022年よりロボット手術が保険適用されました。九州各県でも頭頸部癌におけるロボット手術が始まっていますが、当院が最も多くの症例経験を有しています。

頭頸部は顔面から鎖骨までの範囲を指し、首、口、鼻、喉、唾液腺、甲状腺など多くの重要な機能を持つ部位を含んでいます。この領域における癌治療では、根治を目指すことはもちろんですが、患者さんの生活の質（QOL）をいかに維持するかが重要なテーマとなります。発声や嚥下などの機能を維持しながら治療を行うことが求められ、整容的な観点からも極力顔や首に切開を行わないことを目指します。

従来、頭頸部癌手術では顔面や頸部からの切開が必要でしたが、内視鏡手術により侵襲が減り、さらにロボット手術によって精度と安全性が大幅に向上しました。

ロボット手術を支える九州医療センターの力

九州医療センターでのロボット手術は、日々の臨床現場において患者さんに最善の治療を提供するための手段となっています。患者さんの生活の質を考えた治療を追求し、医師たちの技術と知識を最大限に活かすことができるロボット手術は、これからの地域医療の中で重要な役割を果たしていきます。

一方、da Vinci Xiのような高度で複雑なシステムの導入は、麻酔科・看護師をはじめとした手術室スタッフ、臨床工学技士（Medical Engineer: ME）、さらにINTUITIVE社との調整を行う事務方など、多職種によって支えられています。また、ロボット支援手術に対する患者さんの不安に対しても、外来や病棟のスタッフが丁寧に説明を行っています。外科医の熱意を病院全体で支えることが、九州医療センターの本当の力だと感じています。

今後も、九州医療センターでは最新の技術を取り入れ、地域の皆様に安心して治療を受けていただける医療環境を提供していくことを目指しています。ロボット支援手術は、その一環として、患者さんの負担を軽減し、治療の効果を最大化するための重要な手段であり続けるでしょう。



da Vinci Xi システム



耳鼻咽喉科・頭頸部外科にてXi導入時のシミュレーション
(医師が患者さん役をしています)

はじめに

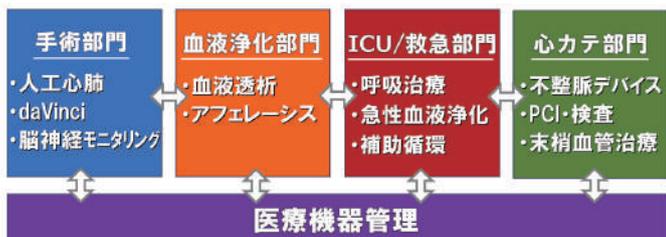
昨今の医療現場では医療機器の使用は不可欠であり、医療機器の高度化・複雑化も相まって医学と工学の知識を備えた専門職である臨床工学技士への関心は高まっています。

臨床工学技士の業務内容は、生体にとって不可欠である「循環」・「呼吸」・「代謝」の機能を代行する生命維持管理装置の操作を筆頭に、医療機器の保守管理・運用マネージメント・教育などを行うことにより医療機器の効率的な運用に寄与しています。今回当院での臨床工学技士の業務について紹介したいと思います。

業務紹介

当院MEセンターは13名の臨床工学技士により構成されており、以下の5つを業務の柱としております。

1. 医療機器管理業務
2. 手術室部門業務
3. 血液浄化部門業務
4. 集中治療・救命救急部門業務
5. 不整脈・心臓カテーテル部門業務



当直体制は無く、365日24時間呼出対応でこれらの業務を担っている。

3. 血液浄化部門業務

当院血液浄化センターでは年間延べ3000件以上の血液透析を実施しており、アフエーシス療法も積極的に取り組んでいます。地域の中核を担う血液浄化療法を提供すると共に、常に安全な治療が患者に提供できるよう各機器の保守点検にも取り組んでいます。



4. 集中治療・救命救急部門業務

集中治療室および救命救急センターでは、人工呼吸器をはじめ補助循環措置（IABP・ECMOなど）、血液浄化装置などの生命維持管理装置の操作および保守管理などを行っています。特に補助循環装置については緊急性も高く迅速な対応が不可欠であるため、医師・看護師と連携して最善の臨床技術支援を行っています。

5. 不整脈・心臓カテーテル部門業務

不整脈治療では、アブレーション治療時に使用する3D Mapping Systemの操作やペースメーカー植込み時に使用するプログラマ操作などの臨床技術支援を行っています。心臓カテーテル検査および治療では、ポリグラフ装置の操作、イメージングモダリティ（IVUS・OCTなど）の操作を行っており、循環不全時には補助循環装置によるサポートも行っております。



最後に

臨床工学技士は周術期部門や緊急性が高い部門での業務が多いため、臨床工学技士との関係が少ない診療科や部署にとっては「医療機器に詳しい技士さん」というイメージが強いのではないかと思います。医療機器に精通しているのはもちろんのことですが、医師をはじめとする多職種と連携することによりチーム医療の一員として臨床に深く関与しています。また医療機器の操作・管理を通じて臨床技術支援を行うことにより、最新最善の医療技術を日々提供できるよう尽力しています。これからも当院MEセンターをよろしく願いたします。



1. 医療機器管理業務

汎用性の高い医療機器6機種（輸液ポンプ・シリンジポンプ・経腸栄養ポンプ・低圧持続吸引器・フットポンプ・人工呼吸器）の中央管理を筆頭に、院内2500台以上の医療機器の保守管理を行っており、事務部門と連携し医療機器購入から廃棄までの一元管理を実施しています。また、医療機器の適正運用を目的としたコンサルタントおよびコスト削減・医療スタッフに対する医療機器研修会の開催などを行うことにより、院内医療安全の向上に努めております。



2. 手術室部門業務

手術部では年間約5500例の手術が行われており、各診療科が円滑に手術を行えるよう、麻酔科医・看護師と連携しながら手術部運営に関与しています。また人工心肺関連装置の操作、ロボット支援手術（daVinci手術）での技術支援、脳神経モニタリングなど幅広い範囲で臨床技術支援を行っています。

ヒポクラテスのカフェ



“赤貝の話”

NHO 都城医療センター 吉住 秀之

待ち合わせの鮓屋に定刻に行き、「もう一人くるからね」と、いと、となりに小皿と箸が置かれた。赤貝のヒモをサカナに、私は酒を飲んでいる。

(吉行淳之介『贗物食物誌』)

赤貝(学名*Anadara broughtonii*)は、英語でBloody clamと呼ばれ、その肉が血のように赤いことを表しています。それもそのはずで赤貝は、他の貝類がヘモシアニンを使っているのに対し、酸素を運搬するタンパクとしてエリスロクルオリンerythrocrutorin(ギリシャ語の赤erythro-、ラテン語の血crutorからの造語)を使っているからです。このタンパクは、ヘモグロビンと同じく鉄を含むヘム基を持っており、4種類のグロビン鎖が会合して12量体となり、それらが4種類のリンカータンパクで結合し六角形の二層構造体を形成しています。分子量が 3.6×10^6 Daという巨大分子が赤血球のような細胞の中に格納されることなく循環して酸素を運搬しているのです。近年献血から供給される赤血球製剤の需要が逼迫しているため、その対策として代用血液が研究されています。ヒト以外の哺乳類の赤血球はその不安定性と毒性から利用しがたく、注目されているのがヒトヘモグロビンと類似した酸素解離曲線をもつエリスロクルオリンで、ゴカイやミミズのそれがもっとも精力的に研究されています。

とはいうものの赤貝といえば、一般人にとっては寿司ネタとして馴染みがあり、特に江戸前寿司には欠かせないネタとなっています。歯ごたえのある食感が喜ばれますが、その分注意

が必要です。俳人の久保田万太郎(1889-1963)は、赤貝を食べた際に窒息し死亡しています。昭和38年5月6日に画家の梅原龍三郎邸の宴に招かれ、振る舞われた寿司を食べたことでした。普段食べつけない赤貝の握りを頬張ったところ、直後に激しく咳き込み洗面所へと向かったのですが、その入り口で卒倒してしまいました。すぐに救急搬送されましたが、治療の甲斐もむなしく息を引き取りました。脳卒中か心臓発作かと周囲の人は思ったそうですが、気管に詰まった赤貝が発見され、誤嚥による窒息死と判明したのです。

この事件は文壇でも話題になったようで、森茉莉の『贅沢貧乏』の中で、この事件のことを紹介した後段で、歯が三本とれてよく噛めない状態ではおぼった冷やし素麺をうまく飲み込めずに吐き出し、「久保田万太郎の赤貝のひもを思い出して恐怖の極だった」と書いています(歯の欠損による咀嚼力の低下が誤嚥のリスクとなることを的確に描いていますね)。映画では、笑福亭鶴瓶が主演した『ディア・ドクター』の中で往診した家の老人が今にも息を引き取ろうかというとき、彼が抱き上げたところ喉から赤貝の紐が出てきて息を吹き返し、人を蘇らせる名医だと評判になったという場面が描かれていました。赤貝のコリコリとした弾力性とその噛み切りにくさが誤嚥の大きな要因です。厚生労働省のHPには、一口あたりの窒息事故頻度が食材別に掲げてあります(もちろんダントツに多いのは餅)が、これは一日あたりの窒息事故死亡症例数を〔食材の一日摂取量÷一口量〕で除したものを人口で割って算出したものなので、普段口にすることはない赤貝は当然のことながらランク外となっています。

窒息にも関連しますが、誤嚥性肺炎の2022年の死亡順位は第6位と高齢社会日本でも軽視できない疾患です。長寿のお祝いにお鮓を食べるといふ際には、祝われる方の咀嚼力にも気を配ってあげてください。



九州とところどころ

おとなもやってみたい!
「キッザニア福岡」

今回は、博多区にある、ららぽーと福岡内「キッザニア福岡」をご紹介します。キッザニアは、楽しみながら社会の仕組みを学ぶことができる「子どもが主役の街」です。この職業・社会体験は単なるごっこ遊びではなく、本格的な設備や道具を使って、大人のようにいろいろな仕事やサービスを体験することができます。世界的に展開していますが、日本には、東京と甲子園(兵庫)、そして福岡にしかありません。

誕生月に行くとバースデー特典があり、各お仕事体験の度にメッセージが貰えたり、イベントでお祝いをしてもらえたりします。我が家では、子どもの誕生月に合わせて行っており、前日から親子で打ち合わせをして、作戦を練って回ります。今回は、朝9時から15時までのチケットでしたが、合計8個

のお仕事やアクティビティを体験することが出来ました!今回は何のお仕事が一番印象に残ったかを尋ねると、妹は警察官、お兄ちゃんはパイロットとのことでした。どちらも制服を着てお仕事をを行い、警察官の体験では、トランシーバーを使って交信したり、小物も本格的でした。パイロット(フライトシミュレーター)は2回目でしたが、なんとレベルアップシステムがあり、難易度が少しずつ上がっていくようで、何度も楽しめるようになっていました。キッザニア内は基本的に食べ物の持ち込みがNGなので、食品加工系のお仕事は大変人気で、今回も枠が埋まってしまい体験できませんでした。また次回チャレンジしたいと思います。

おとなもやってみたい!「キッザニア福岡」。福岡では過去3回、大人だけで入場できるスペシャルデー「大人のキッザニア」が開催されています。

ペンネーム: みみママ



血管造影装置更新のご紹介

血管造影検査主任 池田 啓介

令和6年10月に装置が更新されました。

最近の調査では、日本人の死因は脳血管疾患が4番目に多く、厚生労働省「循環器病対策推進基本計画」においても、脳卒中は発症から1分1秒でも早い治療が予後に影響するため、血管内治療が行える施設の整備が喫緊の課題となっています。脳血管内治療で使われる血管造影装置は、短時間で確実に出血確認や梗塞部位を特定することが必要不可欠です。

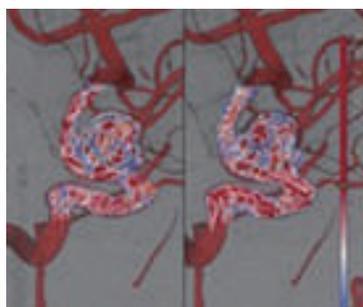
今回更新した血管造影装置はPhilips社製Azurion7 B20/15です。この装置は、20インチの受像パネルを搭載しているため広い視野かつ高画質で全身の血管の診断・治療を迅速に行えます。新装置は、新機能として術者サイドにあるタブレット型タッチパネルを用いて、画像の拡大や縮小、さらにマーカ機能を使用し、術中のライブ画面上に血管のアウトラインやデバイス留置位置を描画することが可能です。その他にもライブ画面やリファレンス画面に表示された過去画像の位置情報を把握し、アームやベッドのポジションを自動再現するオートポジション機能があり、治療部位への効率的なアプローチが可能です。

これまでにない「Aneurysmflow」というアプリにより、造影剤の流れを実測し定量化でき、術前後で血流パターンの比較を行うことができます。血流に変化があるステント挿入等の施術に有効で、フローダイバータステント留置術では特に有用です。また腹部領域では「EmboGuide」というアプリが加わり、腫瘍への栄養血管をナビゲーションするソフトです。TACE（肝動脈化学塞栓療法）において、通常では視認できない栄養血管を描出することが可能な機能です。

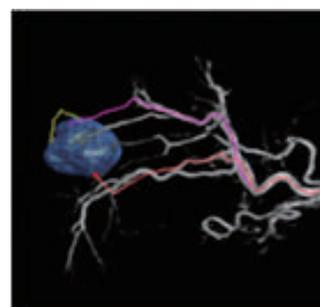
最後に、血管造影検査は様々な診療科医師と看護師、診療放射線技師、臨床検査技師、臨床工学技士が、患者の検査・治療のために協力して行っています。今後も、スタッフ間の連携を高め、患者に寄り添い最適な医療を提供していきたいと考えています。また、ご不明な点やご不安な点がございましたら、お気軽にお問合せ下さい。



血管造影装置



Aneurysmflowイメージ



EmboGuideイメージ

クリスマスツリー点灯式2024

元気本舗隊 職員係長 神谷由紀子



令和6年11月29日、九州医療センター外来ロビーで開催されたクリスマスツリー点灯式は、心温まるひとときとなりました。入院患者さんに季節を感じてもらい、日々多忙な職員に癒しを届けたいという思いから企画したこのイベントには、ピアニストの西直子さんとツインヴォーカルユニット「the LACK」をゲストにお迎えしました。西さんの美しいピアノ演奏で幕を開け、続いて元オペラ歌手のMiccinoさんの伸びやかな低音が響き渡る「クリスマス・イブ」、さらにサチさんの「Let It Go」が力強く歌い上げられ、会場は一気に華やき感動と喜びに包まれました。

イベントのクライマックスとなる点灯のカウントダウンが始まると、期待と緊張が入り混じる中、「3・2・1・点灯〜♪」の掛け声とともにツリーが銀色の光で輝き、拍手が沸き起こりました。この瞬間、多くの協力者に支えられ実現したイベントへの感謝と感動と安堵の気持ちが入り乱れ、涙をこらえきれませんでした。

これからも皆様に笑顔と癒しの素敵な時間を届けられるよう、元気本舗隊は活動を続けていきます。





人事の動き

令和6年10月2日～令和7年1月1日

医療職（一）

就任	肝胆膵外科医師 新井相一郎	退任	臨床研究センター長 高見 裕子
			肝胆膵外科医師 龍 知記



退任の挨拶



23年間お世話になりました

前臨床研究センター長/肝胆膵外科 高見 裕子

昨年末でKMCを退職しました。1997年、朔先生と長大・兼松教授とのご縁で1年間勤務。才津先生のマイクロ波凝固壊死療法（MCN）と出会いました。切除と局所療法とで広がる肝癌治療の可能性に惹かれ、2002年に改めて師事。技術・取り組み方など多くを学びました。2011年には初代日本肝胆膵外科学会高度技能医を賜り、その後も肝胆膵領域に尽力できた良い外科医人生でした。後半の2年余、幹部として愛するKMCの在り方を考える機会も頂きました。

全力を尽くすことができましたのは、病院の皆様、そして患者様との温かなご縁のおかげです。この23年間を支えてくださいました事、心から感謝申し上げます。

皆様のご清祥とKMCの益々のご発展をお祈り申し上げます。



18年間お世話になりました

前肝胆膵外科医長 龍 知記

2004年から初期研修医・外科レジデントとして4年間研修し、2010年から肝胆膵外科医として赴任しました。医師になり大半の期間を九州医療センターで勉強させていただき、たくさんの経験を積ませていただきました。なかでも才津元部長・高見前部長のご指導の下、多くの方々を支えていただきながら、当科での腹腔鏡手術、ロボット手術の導入に尽力させていただけたことは、私にとってかけがえのない貴重な経験になりました。すべての職員の皆様のおかげでこれまで働かせていただいたことに深く感謝申し上げます。これからの九州医療センターのご発展と職員の皆様方のご健勝を心よりお祈り申し上げます。本当にありがとうございました。



MCN20 周年記念パーティー（2008年）



7東カンファランス室にて（2017年）

編集後記

表紙の絵は葛飾北斎による「琵琶に白蛇図」です。琵琶を包む色鮮やかな袋に赤目の白蛇が絡みついています。琵琶は七福神の中の唯一の女神である弁財天の持ち物で、白蛇は弁財天に付き従い支える従者です。財福、技芸、美の女神として知られる財弁天を遊び心たっぷりに表現した作品だそうです。

副編集委員長 占部 和敬

101号から編集に携わらせて頂いてきました。残念ながら、110号をもって、退職のため編集委員からも退きます。少しの間でしたが、KMC NEWSの紙面を考える時間はとても楽しかったです。かかわった10部、その前の記念の100号など、大切にしまっておいて、おばあちゃんになったとき、もう一度ゆっくり読み返したいと思っています。

前編集委員長 高見 裕子



医事統計 患者数・診療点数の推移

■令和6年度は、月平均在院患者数605人と、病床利用率86%達成に向けて取組んでいきましょう！（令和6年11月現在の暫定値）

外来新患者数は、令和6年11月までの実績で15,841名と前年同月までと比べ803名の増となっております。今年度も、新紹介患者の確保と逆紹介の推進が重要となります。1日平均外来患者数は、11月までの実績で881.3名と前年同月までの実績（879.0名）と比較して2.3名の増となっております。

1日平均入院患者数は令和6年11月までの実績で588.8名と前年同月までの実績（573.6名）と比較して15.2名の増となっております。新入院患者数は11月までの実績で前年同月までと比較すると31名の減となっております。平均在院日数につきましては、昨年度と比較して0.2日増えて12.1日となっております。

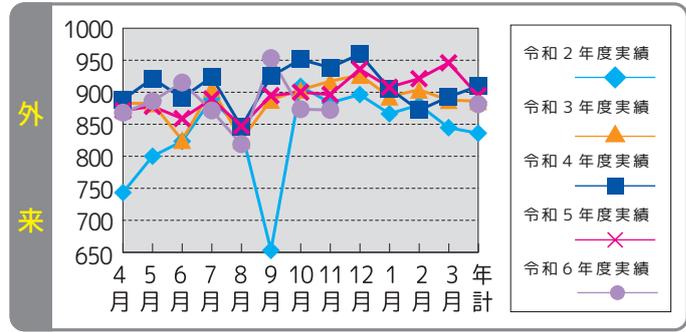
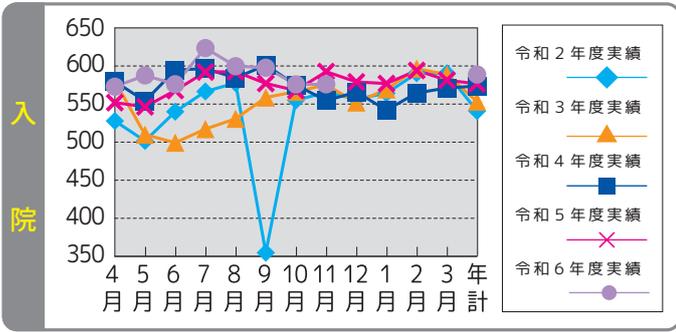
入院1人1日当たり診療点数は、令和6年11月までの実績で8,682.4点と昨年の実績と比較すると161.8点の増となっております。外来1人1日当たり診療点数については、令和6年11月までの実績で3,319.7点と前年同月までの実績と比較して26.7点の増となっております。紹介割合は、11月までの実績で91.0%となっており高い割合を維持しています。

1日平均
入院患者数
(在院)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和2年度実績	527.8	501.6	540.0	566.5	577.7	354.8	555.0	565.3	556.5	564.2	590.5	590.4	540.9
令和3年度実績	580.4	509.8	499.3	517.2	530.7	558.6	566.3	575.2	552.1	569.3	596.6	588.7	553.3
令和4年度実績	579.6	554.0	594.5	596.7	584.3	601.1	575.0	554.6	565.7	542.1	564.5	571.2	573.6
令和5年度実績	551.9	546.4	567.8	592.1	592.6	577.1	567.8	592.6	579.1	576.9	594.1	581.4	576.6
令和6年度実績	572.8	587.6	576.0	623.5	599.7	597.7	575.8	575.9					588.8

1日平均
外来患者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和2年度実績	743.3	800.1	823.4	889.9	840.8	653.0	909.2	883.6	896.4	866.4	880.2	844.7	836.0
令和3年度実績	882.7	882.6	825.3	906.0	825.7	888.1	903.8	917.2	927.0	893.2	903.9	887.8	886.1
令和4年度実績	888.5	921.7	891.1	924.0	846.1	924.9	951.3	938.6	959.6	905.8	871.9	892.6	909.7
令和5年度実績	871.4	877.9	858.9	889.6	847.2	894.8	900.1	896.4	935.9	907.9	921.2	946.0	894.8
令和6年度実績	868.2	886.1	915.2	871.6	818.9	953.4	873.5	872.4					881.3

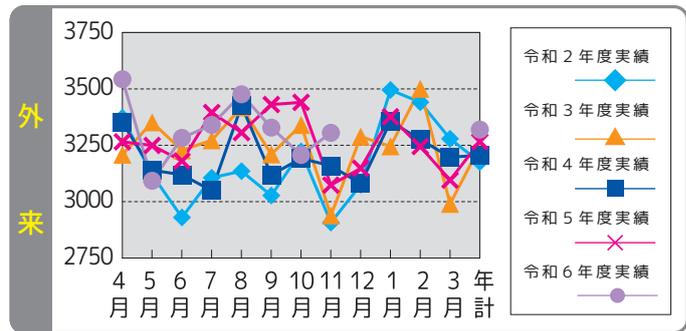
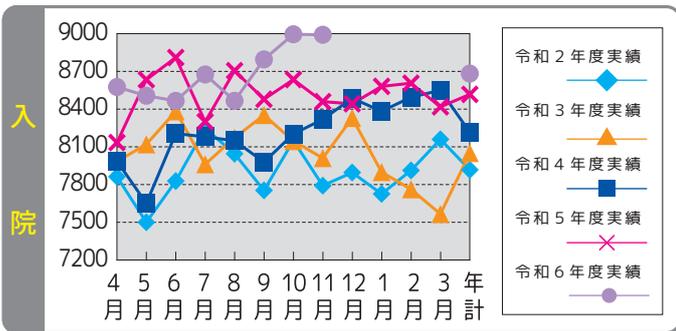


入院
1人1日当り
診療点数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和2年度実績	7,862.5	7,500.1	7,827.7	8,247.6	8,044.8	7,753.7	8,149.1	7,791.3	7,895.8	7,725.7	7,912.4	8,159.6	7,917.4
令和3年度実績	7,983.7	8,119.7	8,381.9	7,961.4	8,172.2	8,352.7	8,146.2	8,010.4	8,329.4	7,899.1	7,762.5	7,565.7	8,050.3
令和4年度実績	7,986.1	7,650.9	8,205.6	8,179.4	8,148.4	7,979.0	8,202.6	8,318.7	8,486.7	8,383.0	8,494.2	8,550.1	8,215.4
令和5年度実績	8,134.0	8,634.1	8,810.2	8,299.8	8,705.5	8,478.6	8,634.9	8,459.3	8,442.2	8,580.9	8,605.9	8,418.0	8,517.2
令和6年度実績	8,575.7	8,506.4	8,465.6	8,675.5	8,466.0	8,795.2	8,995.0	8,991.3					8,682.4

外来
1人1日当り
診療点数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和2年度実績	3,372.3	3,119.3	2,930.1	3,105.9	3,135.4	3,027.2	3,222.5	2,907.3	3,074.9	3,495.5	3,441.0	3,278.8	3,175.6
令和3年度実績	3,208.4	3,351.9	3,227.9	3,272.2	3,418.7	3,209.9	3,340.1	2,938.5	3,288.3	3,245.5	3,500.6	2,990.2	3,243.9
令和4年度実績	3,351.1	3,139.6	3,119.2	3,049.0	3,425.7	3,118.9	3,191.8	3,158.9	3,079.7	3,356.1	3,275.7	3,197.4	3,205.3
令和5年度実績	3,265.5	3,249.2	3,180.3	3,395.3	3,306.4	3,430.7	3,440.4	3,073.4	3,148.1	3,376.5	3,244.6	3,095.5	3,266.1
令和6年度実績	3,543.0	3,092.6	3,282.8	3,340.4	3,476.2	3,328.4	3,207.1	3,305.2					3,319.7



紹介割合
推移

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	年計
令和2年度実績	77.7	98.1	96.2	88.4	89.0	90.2	98.4	93.8	97.0	76.4	90.4	97.8	91.5
令和3年度実績	93.9	87.6	96.2	95.8	92.2	92.1	99.3	100.3	101.1	91.0	76.6	94.0	93.6
令和4年度実績	94.9	95.7	97.2	84.3	81.9	94.4	96.1	94.9	87.5	90.0	98.6	97.1	92.7
令和5年度実績	96.4	95.7	97.4	96.9	96.0	98.7	97.8	95.3	95.7	95.9	91.9	95.6	96.2
令和6年度実績	93.6	90.8	95.0	89.1	90.0	88.5	90.9	89.9					91.0

